

「ことばの教育」パイロット校事業 報告書

学校名	尾道市立上川辺小学校
校長名	高山 哲俊
所在地	尾道市御調町本737-2
HP	http://www.onomichi.ed.jp/kamikawabe-e/
学級数	6学級
タイプ	タイプ

1 研究の概要

(1) 研究主題

① 研究テーマ

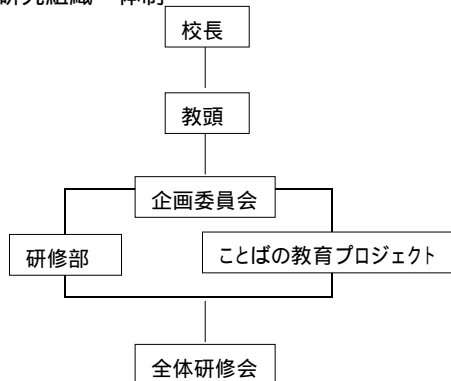
論理的に考え適切に伝え合う力の育成

— 書くことを中核とし「読む力」を高めるために—

(2) 研究のねらい

伝え合う力を育成するために、**国語科**の授業の中で昨年度から身に付けた「言語技術」を**効果的に活かし**、論理的思考力を育てていく。また、「言語技術」の習得により「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の言語能力を確実に伸ばし、子どもひとりひとりが、自己の言語生活を切り開き、自己を変容していくことができる力の育成を目指す。

(3) 研究組織・体制



2 2年間の取組みの概要

(1) 研究内容

① 「読解力」向上を目指す指導体制の工夫・改善

⑦ 説明的文章を中心とした授業の工夫改善

・「読む」ための学習技能の明確化と効果的活用

⑧ 「読む」ための学習技能を身につけさせるための学習方略の開発

・単元のねらいに合わせた学習技能を身につけさせるための工夫・テキストの開発

② ロジカルコミュニケーション力の育成

⑦ 伝え合いの場の設定

・計画的なことばのトレーニング

⑧ 国語科と「言語技術」と他教科との関連

・算数科での効果的活用（練りあいの場における、発言のしかたのモデルの活用）

(2) 授業改善の視点

① 指導案の中に使いたい「言語技術」を「どの時間に」「どこの場で」「どのように使い」「どのような効果を期待するのか」明記することにより、つけたい力をより明らかにする。

・「言語技術」を効果的に使い授業に生かすために、単元のねらいに沿ったテキスト（基本のスキル理解のためのスキル）で取り出し指導をして学習方法を身につけさせる。

② 「言語技術」のトレーニング（つくば言語技術教育研究所 三森ゆりか先生のカリキュラムを参考）の計画的な実施。

・週2回のチャレンジタイムでの継続指導

（13:55～14:10）ことばのワークを使用年間10時間の全校ことばの教室（教科等外）

・討議を通して生きたことばの使い手を育てる。

・パイロット教員の全校一斉指導を通して職員研修の場とし、自己の指導に生かす。



③ 生活全ての中で「言語技術」を意識して場・目的・相手に応じたことばの使い方を指導する。

（例）朝のあいさつ運動（会話にまで高めたもの）集会での発表と意見交流の場の設定等

④ 「言語技術」を導入した算数科の授業提案をし、論理的思考力の育成を図る。

(3) 実践例

< 第4学年 国語科 >

単元名 くらしの中の和と洋（東書 4年下）

単元の目標

「和」と「洋」の対比に注意して文章の要点を読み取ることができる。

授業の工夫（「言語技術」を指導案に明記する）

「くらしの中の和と洋」をセルフディベートの手法を使って読み解こう

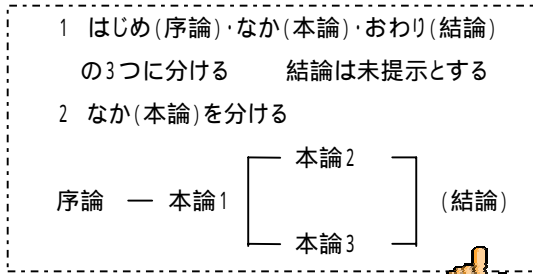
受け答えの技術（問答ゲーム）

本校レベル7 賛成ですか・反対ですか

和と洋のちがいを、その「よさ」に注目しながら比較・対比で読ませていく。そのための方法として、ディベート形式を取り入れた。

指導の手順の柱は次の3点とした。

(ア)構成を考える



<取り入れる「言語技術」>
受け答えの技術 構成を考える技術
既習学習の基本型をもとに型を見抜き、内容を構造的に読ませる。

(イ)論理を考える

- 1 思考の組み立て方がわかる表現を参考にする
 - ・対比の観点 AとBのちがいは～
 - ・思考の仕方 このちがいが～
 - ・対比して述べる Aは～である。一方Bは～
 - ・秩序立てて まずAは～ 次にBは～
- 2 本論2 本論3 の情報をセルフディベートで整理する。
(例)和室でたたみに座ると2つメリットがある。
1つ目は … 2つ目は …
一方洋室は

見つけさせる。<取り入れる「言語技術」>
情報を正しく伝える技術 様々な角度から物事を見る技術
比較・対比の思考を助けることばを的確に見つけさせる

(ウ)批判的に読む (省略)

<あいさつ運動>

習得した「言語技術」を生活の中で活用し、教師と児童・児童同士(異学年)間で生きたコミュニケーション能力を育成する。



- ⑦互いの名前を呼び合う。
- ⑧受け答えの技術と構成を意識して、三文で簡潔に話す。
- ⑨話題が広がるような質問をする。
- ⑩相手の意図を受け止めた感想や意見を添える。
- ⑪アイコンタクト・笑顔を意識して行う。

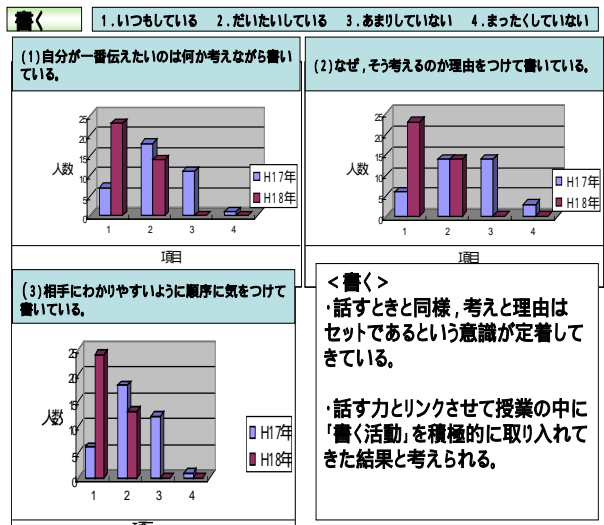
③<論述する場の意図の設定>

思考の道筋を言葉にし、他者に分かりやすく伝えるための工夫(各教科の授業展開の中で・テストの改善)

3 研究の成果と課題

(1) 成果

<ことばに関する児童アンケートより(抜粋)>



<書く>
・話すときと同様、考えと理由はセットであるという意識が定着してきている。

・話す力とリンクさせて授業の中に「書く活動」を積極的に取り入れてきた結果と考えられる。

<「基礎基本」定着状況調査>

	平成17年度	平成18年度
国語	86.4	89.6
算数	91.5	93.0

ことばに関する児童アンケートにおいて、昨年度に比べ、「書く」の領域で大幅に伸びている。児童が「伝えたいこと」「理由」「順序」に気をつけて書くようになった。

「言語技術」の導入により、「基礎・基本」定着状況調査の通過率が昨年度と比べて高まった。

「言語技術」を習得したことにより、分かりやすく伝えるためには、どんな技術を使ったらよいか工夫や努力をする児童がふえてきた。(授業中・集会・生活全般の場面で)考え(意見)と理由はセットである、という形が身につく、答えだけを求めがちであった学習から、「理由は…」と根拠を考え討論する場面が多くみられるようになってきた。指導者自身の課題が明らかになり、思考を深める発問のあり方など授業改善につながっている。

ねらいに迫るための「言語技術」を導入することによって、学習方法を具体的につかむことができ児童自らが課題解決のための思考を深めることができた。

(2) 課題

授業のねらいに迫るための効果的な「言語技術」を考え、目的に合ったトレーニングを継続的に積み重ねる。ツールである「言語技術」をどこでどのように生かし、ことばの力をつけていか研究を深める。

(3) 今後の改善方法等

教科の特性にあった「言語技術」の効果的な生かし方の具体的な資料づくりとねらいに迫る授業研究を進める。